
【主題】自ら求めて、友とともに意欲的に学び合う生徒の育成

【副題】～生徒が探究する授業の創造を目指した「学びの共同体」10年の取り組み～

【学校・団体名】長野県中野市立中野平中学校

【役職名・氏名】校長 有賀 泰司

I 研究テーマ・ねらい

文部科学省からの公表により、次期学習指導要領に盛り込まれた「主体的・対話的で深い学び」への関心が高まる中、それらの学びをどのように具現化すればよいか不安に感じている教師は少なくない。そのような実情の中、具現化するための方法として、ディベート・課題解決学習・学びの共同体・ジグソー法等、教育誌がさまざまな実践例を取り上げているが、小中学校での取り組みが拡大している「学びの共同体」の実践は、特に注目を集めている。

学習指導要領改訂の方向性「学校教育を通じてよりよい社会をつくるという目標を共有し、連携・協働しながら必要な資質・能力を育む」は、「学びの共同体」の学校ビジョンの「子どもたちが学び育ちあう学校」に通じる。そして、本校の教育目標（＝研究テーマ）も「自ら求めて、友とともに意欲的に学び合う生徒」であり、生徒が主役になる授業を目指すなかで、教師・生徒ともに社会の創り手として共に成長したいという強い願いは、さらに高まる。

しかし、過大な学習指導要領の内容を網羅し高校受験に向けた得点力を伸ばすために、内容を習得させるための指導方法や評価テストの出来栄に意識を注がざるを得ない状況もある。そのような厳しい状況は本校においても同様であるが、本校では「学びの共同体」をよりどころとして、生徒の主体的な学びを最重視した取り組みを目指しつつ成果を得ることができている。

様々な指導感をもつ教師が、共通の理念をよりどころとし、お互いの教育観や教師力を磨き高めあう素地がある。これまで授業の質を高めようと、真剣に方法

論を搜索してきた教師も、本校に赴任して学びの本質に立ち返ることができたと声をあげている。そして、その雰囲気は授業と生徒の姿に反映されている。

今年度で「学びの共同体」がスタートして10年になる。テーマ具現に向けた先生方のご努力・実践と、それを支える理念・実践体制について振り返り、成果と課題を明らかにしたい。

II 「学びの共同体」について

1 「学びの共同体」の学校のビジョン

学びの共同体の学校は、子どもたちが学び育ちあう学校であり、教師たちも教育の専門家として学び育ちあう学校であり、さらに保護者や市民も学校の改革に協力し参加して学び育ちあう学校である。

学校の公共的な使命と責任は「一人残らず子どもの学ぶ権利を保障し、その学びの質を高めること」にある。教師は、生徒の目線になって共に育ち合う。また、教師同士も同じ教育の専門家として目線を一にし、初任者もベテラン教師もお互いに学び合うというスタンスを大切にしている。

2 「学びの共同体」の哲学（「学校を改革する」佐藤学著より）

(1)公共性の哲学

学校は公共空間であり、内にも外にも開かれていなければならない。すべての教師が最低年1回は自らの授業を公開し、すべての同僚とともに子どもを育てる関係を築いていく必要がある

(2)民主主義の哲学

例えば、職員室で生徒が一人残らず固有名で話題に

なるなど、一人一人が主人公になって協同している学校でなければならない。それは、子どもも教師も校長も保護者でもある。

(3)卓越性の哲学

他と比較して優れるのではなく、どんな条件にあっても、その条件に応じてベストを尽くし最上のものを目指すということ。どんな条件であっても、丁寧さと細やかさを大切にして、最高の学びを求めるところを習慣にする必要がある。

3 「学びの共同体」を創るための活動システム

(1)対話的学び

- ・活動的で協同的で反省的な学びの追求
- ・聴き合う関係の構築
- ・男女4人の小グループによる学習の導入

(2)同僚性の構築

- ・クラス・教科の壁をなくし学年の教師集団を中心として生徒一人一人の学ぶ権利の実現をめざす

(3)授業研究を中核とした学校経営

- ・研究部は教頭・教務と主に学年主任で組織する。
- ・すべての教師が最低年1回授業を公開する。
- ・授業研修は1時間の授業参観と話し合いで組織し、教科単位ではなく主に学年単位で実施する。

(4)授業の事例的研究

- ・事前の研究（特に授業の説明づくり）よりも事後の研究（分析）を重視する。
- ・授業のどこで生徒が学び、どこで学びが閉ざされたか、教室の事実の捉えを中心に議論する。
- ・参観者は授業者に助言するのではなく、授業の事実から学んだことを語り合う

III 共有する理念・方法

1 テーマ実現のために教師が大切にすること

- (1)「聴き合い」を大切にした支援と関わり方の指導
- (2)4人グループを基本とした「学び合い」学習（個人作業の共同化）
- (3)2～3割の生徒が到達できる高い課題（ジャンプ課題）の提示
- (4)教師の居方（聴く・つなぐ・もどす）の追究

2 実践の具体的なポイント(これまでの研究から)

(1)授業デザイン・考え方

- 授業デザインはシンプルに。課題(活動)は3つま

で

- 授業開始10分が勝負。(5分で課題把握、グループ学習に入りたい)
- 分かりそうで分からない課題設定で女子を夢中に
- 教え合いと学び合いは違う、(教えてもらうのを「待つ子」をつくらない)
- 話し合いと学び合いは違う、学び合いは「ぼそぼそ…」
- 学びの3要素は「夢中・工夫・もがき」
- 夢中になれないのは課題が易しすぎるから

(2)教師の居方

- 7対3で女子を指名し、女子を前に出してあげる
- 共有課題で時間をかけすぎない
- 教師は「ことば」と「身体」を柔らかくして
- 教師の言葉は少なく、話し過ぎてはいけない
- 座って授業ができるようになったら本物

(3)グループ学習

- 教師がグループに入るのは参加できない生徒をグループの仲間とつなぐ時だけ
- グループに任せ、グループにゆだね、もがかせる。そこには教師のケアが必要
- 先生の動きが邪魔にならないと、子ども達は安心して夢中になれる
- 個の学びを保障し、かつ協同して追究ができる環境を整える

3 コの字型の座席配置

コの字型の座席配置を基本とする。授業で生徒がお互いの顔を見ながら学習したり、発言時やそれ以外の場面でも生徒同士がコミュニケーションを取ったりしやすいようにする。一般的に多く用いられている前向きの座席（教師とそれ以外の全生徒が対面する配置）は基本とはしないが、教師中心の指導場面等では、適宜座席を移動するようにしている。

4 4人グループ(男女混合)の活動

生活班はどのクラスも4人グループを基本とし、男女別グループや習熟度別グループは作らない。異質集団を基本とし、「学び合い」が生まれやすいようにする。

3人や5・6人グループでもグループ活動を行うことができるが、人数的に最もコミュニケーションがとりやすい



グループ学習の様子

のが4人である。生徒間の距離が近いので気軽に声が掛けられて聴きやすい、話し合いの場面では物静かな生徒も安心して参加できる、声が全員に届く等のよさがある。

5 机・椅子の高さの統一

すべての学級で、教室内の机・いすの高さを統一している。どの教室に行っても、机といすの高さは皆同じである。

机を寄せて学習を行う際に、ペア・グループ内の机が平らになるので、人やものに関わりやすくなる。例えば、グループに一枚の資料を渡して見合い考える時に見やすかったり、個別に学習するときに友達のノートの様子が見やすかったりする。

6 指導案の簡略化

お互いの授業デザインを伝えるための指導案の形式を簡略化する。そうすることで、事前の研究よりも事後の研究を重視する。指導案の内容を主に共有課題・ジャンプ課題と座席表とし、学年内研究会では教師が設定した課題を追究する生徒の姿を固有名で語り合う。

指導案の内容が洗練化することで、指導案を作成する手間（時間）が減る。そこで生み出した時間を主に、「ジャンプ課題をどう設定するか」を中心とした、より実践的な教材研究に充てられている。

指導案の簡略化は、教師の授業力向上と授業改善に寄与している。

IV 研究体制と実践

1 4月全校研究会（出発の会）

「学び合い」に向けての理念と方法の共有
 国語 三年二組 山崎智子先生
 題材名 詩「春に」 谷川俊太郎

4月早々（第2週）に授業を公開していただき、全職員で学び合った。3年生にとっては年度初めの授業になったが、新任の先生を含めた大勢の先生方の前で生き生きと学ぶ生徒と教師の姿から、理念と方法を理解することができた。授業者の山崎先生にも快く引き受けていただき、「同僚性」「開かれた教室」を示していただいた。

事後の研究協議会では、研究主任から「学び合い」に向けての理念や職員が共有する方法についての説明

平成29年度 個人研究テーマ	
氏名	教員
3	国語 仲間と言葉を通してかわり、ともに考え、学び合える国語学習の課題設定のあり方
4	家庭 生活と学習を結び付ける授業づくり
5	理科 生徒が目的意識をもって観察・実験を行うための授業展開のあり方
11	社会 社会科におけるジャンプ課題の設定のあり方
12	数学 既習の内容を基にして、数量や図形などの性質を見出し、発展させる授業づくり
13	国語 自分の考えをさらけ出し意見を聞き、話す・聞く書くの各領域での表現力を高める授業作り
14	数学 数学的思考を伸ばすために、教える場面と個人で考える場面とグループで考える場面の設定のあり方
16	理科 学力底力の生徒もわかってできるようにする指導の工夫
17	英語 生徒の思いとつながり、仲間とともに課題解決していく学習課題のあり方

があった。その説明を踏まえ、授業づくりや教師が心がけること等について、参観授業での生徒の具体的な姿を通して、話し合ったり、分からないことを聞き合ったりして、共有を進めることができた。

2 個人研究テーマに向けた実践

年度初めに、個人研究テーマを設定し、そのテーマに向けて1年間研究を行う。

学年内の公開授業では、授業者の研究テーマをもとに生徒の姿や授業デザインについて議論することもある。年2回の自主公開でも、個人研究テーマ一覧を配布し、参観者の方々に授業を見ていただく。

また、研究の成果と課題については、校内研究まとめの会（2月）のグループ討議で伝え合ったり、教員評価シートにまとめたりしている。

3 年2回の自主公開における全授業の公開・研究会・佐藤学先生のご指導

(1)公開全般の様子

春と秋の年2回、自主公開として学校を終日公開し、指導者の佐藤学先生(学習院大学)からご指導をいただいている。内容は、①2・3校時 全職員・クラス公開授業 ②課題別情報交換会 ③中心授業公開 ④授業研究会の公開 ⑤佐藤学先生のご指導・講演 である。佐藤学先生からは、全学年・クラスの生徒の姿から学校全体の研究推進・生徒指導についてご指導をいただく。

校内の先生方の学び合いはもちろん、指導者の佐藤学先生のみならず、県内外からお見えになる多数の先生方からご意見をいただき、学ぶことができる。

(2)中心授業から

春の自主公開 5月26日（金）
 中心授業 社会科 2年1組 平山司先生
 単元名 近世の日本「江戸幕府の成立と鎖国」

江戸幕府の鎖国の背景と流れを理解し、「あなたなりに鎖国政策を評価し、江戸幕府への通知表を書きましょう」というジャンプ課題について考える授業であった。社会科に限らず5教科では、「なかなか答えにたどりつけない」（答えが1つの）課題をジャンプ課題とするのが一般的である。しかし、今回の授業では、得た知識を「通知表」として表現し、あえて「誰でも何か



書いてしまおう」が、その評定の意味がそれぞれ違う

(答えの質を高めたり、友と比較し学んだりすることができる) ジャンプ課題の設定にチャレンジした提案性のある授業になった。課題はあるが、ジャンプ課題のあり方や可能性について、生徒の姿から理解を深めることができた。

佐藤学先生からは、課題が難しいとつい教師が説明を多くしたり、一斉学習で結論を押さえたりしがちだが、「教えすぎずにグループ学習で生徒にゆだねること」が大切であることや、偏った視点や立場で「歴史を評価することの危険性」等についてご指導いただいた。

＜参観者の感想＞

○ 研究会で先生方の視点が子どもの学びの姿から始まる様子を見て、参観の視点、授業改善の視点が共有されていることの重要性を感じました。子どもを変えるためには、まず教師の見方を変える必要があると改めて実感しました。ジャンプ課題を子どもと共に楽しみながら、先生方と楽しみながら、見つけていきたいと思えます。

(4)月1回の学年内公開授業による学年研究会

この研修が、学校全体の研究推進の大きな原動力になっている。月に1度、主に水曜日に学年研究の日が年間計画に位置づいている。学年内で授業を公開し合い、放課後に授業研究会を行う。1人1公開とし、すべての先生が授業を行う。授業研究会ではこれまでのその生徒の育ちと、見とりを元に、実名で子どもたちの学びを語り合い、教師の姿から学んだことを語り合う。本時の授業デザインに授業研究会のまとめを加え、A4 1枚のレポートにまとめて他学年も見合えるようにしている。

(5)学びの共同体実践校への視察

県外の学びの共同体実践校へも積極的に視察に行き、教師個人の学びを深めるだけでなく、研修の成果を同僚や都市に広めている。3名が視察研修を行った。

平成29年度 視察校
○ 神奈川県相模原市立上溝南中学校
○ 石川県金沢市立紫錦台中学校
○ 山梨県富士川町立増穂中学校

(6)生徒アンケートによる授業評価

生徒にアンケートをとり、一年間の授

2017年度 授業アンケート【生徒編】	
教科	満足度の割合(満足・やや満足)
国語	5・4・3・2・1
社会	5・4・3・2・1
数学	5・4・3・2・1
理科	5・4・3・2・1
音楽	5・4・3・2・1
美術	5・4・3・2・1
体育	5・4・3・2・1
技術	5・4・3・2・1
家庭	5・4・3・2・1
英語	5・4・3・2・1

業を振り返る。集計・グラフ化し、それぞれの先生方・教科が行った授業がどうだったかを見返す材料とする。

(7)まとめの会 (1月 全校研究会)

1年間の研究について振り返る。主に、個人テーマについての成果と課題を中心に、学年・教科が入り混じった小グループで語り合う。研究の成果のみならず、新たな課題や悩みを聴き合うことで、授業力の向上と今年度の残りの授業、そして来年度の授業づくりへの意欲を膨らめた。

V 成果

1 生徒の姿から

下図は学校自己評価 (生徒) の結果の一部である。生徒たちは、授業や学習にかなり高い評価をつけた。

このような結果は、他のすべての調査 (進路適性検査・体力テスト・全国学テの質問項目等) でも同様であり、子どもたちは意欲的に追究ができていと捉えることができる。

自主公開でも、佐藤学先生や参観者の先生から、友達同士で支え合って追究する姿を、高く評価していただいた。テーマの実現に向けた取り組みの成果である。

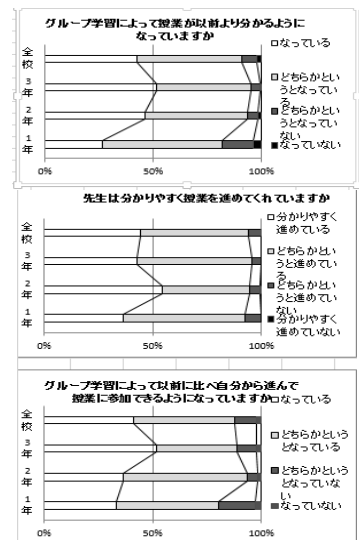
2 教師の姿から

「子どもたち、教師たちが共に学び育ちあう学校」の中で、自分の教育観・教師観を見返すことができた。子どもたちがいきいきと探求する課題づくり・授業づくりを、お互いに楽しみ、悩みながら考え合うことで、同僚性を高めることができた。

3 今後の展望

学びの共同体として学校改革がスタートし、当時の研究体制は10年続いた。

生徒と共に教師が学び続けてきたことが、友とともに意欲的に学び合う生徒の姿に表れている。学びの共同体を知らずに、不安な気持ちで赴任してきた教師も、



生徒に支えられ教えられ、理解を深めてきた。

だからこそ、これまでの踏襲に陥ったり学び合う生徒の姿に甘えたりすることがないように、生徒・教師がビジョンを共有し合い、授業力・同僚性を更に高め合える研究体制の再構築を目指したい。